

## キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(3) —ノアの箱舟の物語を中心に—

柴 田 智 世

### 1. 研究の目的

本研究では、キリスト教紙芝居を保育に取り入れる際の一つの指針を探っていきたい。

これまで筆者は、キリスト教紙芝居について研究を進めてきた。(尾上・柴田 2014、2015) 一般の紙芝居を選択するよりも困難を伴うのは、聖書に基づいて作成された紙芝居であるがゆえに、保育者はまず、聖書を理解するところから始めなければならないという点である。また、紙芝居を文面上のみ理解しただけで読むのでは、子どもから内容についての疑問が提起された際に、表面的な回答に終わってしまう。言うならば、子どもの豊かな発想をくみ取ったり、想像を膨らませて物語を味わうことが出来かねる。

キリスト教紙芝居の物語を分析するには、一般的には、註解書を読むことから始め、当時の時代

考証、物語の意図するところの正しい理解など、いくつかの要素を考慮する必要がある。本稿では、その一つの在り方を探り、保育者や学生が紙芝居を選択する際の目安となるものを提示したいと願う。

### 2. 研究の方法

本研究では、旧約聖書の創世記 6 ～ 9 章のノアの箱舟の話を取った紙芝居 4 作品を取り上げる。各作品の比較・特徴を考察し、更に聖書の註解書に基づいて、福音のメッセージを探る。

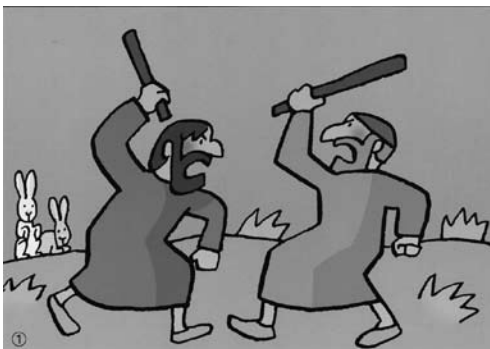
### 3. 結果

各作品について場面ごとの分析を行った。それらを次の表に示す。

表

作品①「ノアと箱舟」文・大越結実、絵・G. エヴラール、V. グロベ  
いのちのことば社、2005 年 [聖書箇所 創世記 6 章 5 ～ 9 節、17 節]

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	神様「どうして、あんなに悪いことばかりするのだろう。うそをついたり、どろぼうをしたり、けんかをしたり。」	⇒神様が人間の世界を見て嘆いている。絵では、喧嘩をしている 2 人が大きく描かれている。(挿絵参照)
2	神様はノアに大きな舟を作って、家族と動物たちを乗せるようにと命じている。ノアは指示に従う。	⇒ノアが作っている舟の大きさがよく伝わる。



場面 1



場面 3

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(3)

3	舟が完成し、神様は7日後に雨を降らせるとノアに言う。そして、ノアの家族、多くの動物たちが乗り込む。	⇒動物はつがいで描かれている。乗り終えると、舟の戸がひとりでに閉まったと本文にあり、ここからドラマが始まることを予想させる。(挿絵参照)
4	黒い雲が現れ、どしゃぶりの雨になる。雨は40日40夜続き、一番高い山も水に沈んで見えなくなるほどの大洪水となる。その中で、ノアの舟だけは水に浮かんでいる。	⇒この作品の絵全体に当てはまることであるが、絵が大変シンプルである。大洪水になりながらも、聞き手には緊迫した雰囲気は感じられない単調な描き方である。
5	雨が降り始めてから150日が過ぎ、神様が風を吹かせ水が引き始める。ノアが鳩を放すとオリーブの枝を加えて戻ってきた。	⇒はとが嬉しそうに飛んだと本文に書かれており、ノアの家族も鳩を温かいまなざしで眺めている様子が描かれている。読者にとっても、ほっとする場面である。
6	神様「舟から降りなさい。鳥も動物も、みんな連れ出しなさい。」 ノア「ああ、いい気持ち!」「神様、ありがとうございます。」 ノアは、祭壇を作って神様を礼拝する。	⇒動物たちが喜びの表情で舟から出てきている。神様は、空に虹をかけたと記述されており、絵の中にも同様に描かれている。

考察

絵は、大変シンプルな線でアニメ的であることが特徴である。大人には物足りなく感じる面もあるだろうが、子どもにとってはこのような単純なタッチの絵も好まれると思われる。

3場面には、当時の人々がテントのような簡易的な住居で生活し、火を焚いて食事の支度をする様子があり、暮らしぶりを読み取ることができる。

全6場面であり、作品全体としても簡潔な文章で、中身の薄さを感じる。しかし、足りない点は、読み手が適切な説明を加え、子どもとのやりとりを十分に行うことにより、補足できる可能性もある。

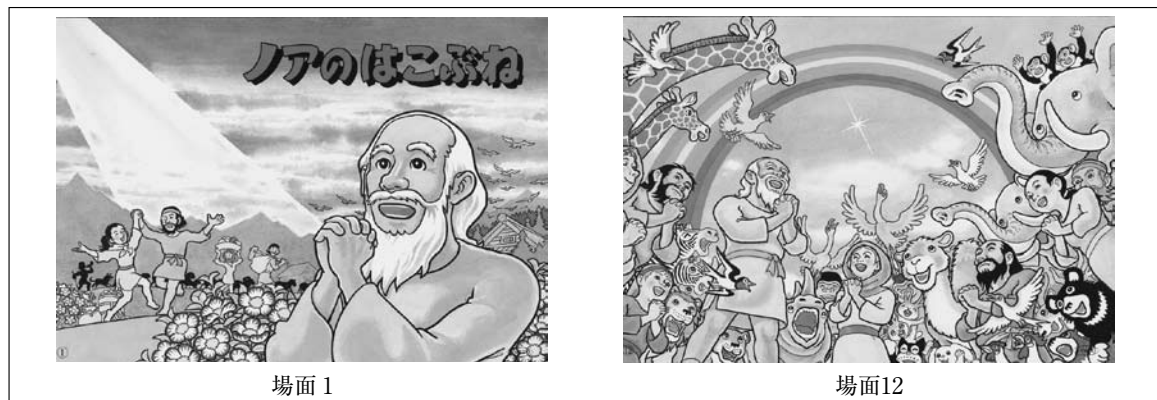
聖書との関連性

動物たちがつがいで描かれているが、紙芝居の本文中にはそのような記述はない。子ども達には、雄と雌のペアであったことや、子孫を残すための神の計画があったことを、読み手が補足した方が良いだろう。また、本作品ではノアが鳩の前にカラスを飛ばしたことについては省略されている。

最後に出てきた虹は、聖書に照らすと、神と大地の間に立てた契約のしるしである。(創世記9:13) この点についても、虹の意味するものについては、読み手が言葉を添えると内容が深まると思われる。

作品②「ノアのはこぶね」文・飯 光、絵・永田竹丸

キリスト教視聴覚センター、1994年〔聖書箇所 創世記6章5節～9章17節〕



場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	<p>ノア「神様、きょうも一日お守りくださって、ありがとうございます」</p> <p>神様「ノアよ、あなたはわたしを信じる、心の正しい、やさしい人だということをわたしは知っている。……。」</p>	⇒冒頭は、ノアの祈りから始まり、神様の呼びかけへと続いていく。(挿絵参照)
2	<p>神様は、自身がつくった人間を含めた全世界が悪い姿になったことを嘆き、大雨を降らせて滅ぼそうとしていることをノアに告げる。しかし、ノアの家族は助けようとしていること、そのために箱舟を作って動物も一緒に雄と雌で乗せるようにと命じる。</p>	⇒絵は、罪に汚れた人々の生活の様子が詳細に描かれている。喧嘩や争い、盗難、泥酔、怠惰、泣いている子どもも登場し、様子がよく伝わる。
3	<p>ノアは早速、家族と共に箱舟作りに精を出す。大きさは、大人が端から端まで歩いて 200 歩もあるとの記述がある。</p> <p>その一方で、神様を信じていない人が、ノアたちの様子をあざ笑う表情で描かれている。</p>	<p>⇒箱舟の大きさがどれほどだったのか、想像することができる書き方である。</p> <p>⇒ノアの家族は従順に舟を作る。全て手作業で行われている。神様を信じる者と、そうでない者が平行して一枚の絵に表れている。</p>
4	<p>完成間近になり、ノアは家族に対し、動物を雄と雌 1 匹ずつ連れてくること、人と動物の食べ物を用意するようにと指示する。</p> <p>ノア「だいじょうぶ。きっと、神様が助けてくださるから。」</p>	⇒ノアは人から笑われても、汗をかきながら舟の完成を待ち望みつつ一生懸命働いている。また、この先も神様が助けてくれるという、ノアの信仰が本文中にも記述されている。
5	<p>神様「ノアよ、さあ、箱舟にのりなさい。」</p> <p>ノアは、大きな動物は 1 階、小さな動物は 2 階、鳥は 3 階へと案内し、皆の部屋や食べ物があることも伝えている。</p>	<p>⇒神様の合図が出て、動物たちが順に舟に乗り込む。</p> <p>⇒生き物を慈しみ、愛するノアの優しさが誘導する姿からよく伝わる。また、ノアが最後に乗り込むと、神様がドアを閉めたときと書かれている。絵の中には神様の姿は見えないが、この出来事に神様の力が働いていることが読み手に伝わる。</p>
6	<p>大雨が降り、町や山など全てのものが沈んでしまう。</p>	⇒激しい大雨によって、人々や生き物たちが助けを求める様子が描かれている。
7	<p>ノアと動物たちは箱舟の中で雨の止むのを待つ。何日も過ぎ、雨が止む。</p>	⇒絵にはノアたちの舟が大きく描かれ、大雨の中を緊迫した状況で耐えている。
8	<p>箱舟の窓が開き、ニワトリが嬉しそうに鳴く。</p> <p>ノア「ああ、神様、ありがとうございます。」しばらくして、舟はアララト山にぶつかって止まる</p>	⇒箱舟の動物たちが窓から見る景色に歓声をあげている。喜びと共に、明るく生命力に満ちた場面である。
9	<p>水の引き具合を確かめるため、ノアは窓からカラスとハトを飛ばす。二羽とも戻ってきたため、まだ大水に満ちていることが分かる。ノアは二羽を労わる。</p>	⇒ノアや動物たちがカラスとハトに望みを託している。戻ってきた二羽に、ノアが優しい言葉をかけている。

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(3)

10	それから7日後、ノアはもう一度ハトを放すと、オリーブの葉をくわえて戻ってくる。また、7日後にハトを放すと戻ってこなかった。 神様「ノアよ、さあ、箱舟から出なさい。」	⇒皆は順番に、オリーブの葉の香りをかいで、喜びを分かち合う。 ⇒ノアが慎重に外の様子を確認し、神様の指示によって動物たちは箱舟から出ることが許可される。
11	ノアと息子たちは石で祭壇を作り、感謝と共に礼拝を捧げる。	⇒火を囲んでノアたちが礼拝する姿を、背景から動物たちも心を合わせて見守っている。
12	神様は、空に虹をかけ、これからは洪水を起こさないことを公言し、動物たちに好きな所に行き仲良く暮らすようにと述べる。 ノアは、皆で力を合わせて新しい世界を大切にすることを心に誓う。	⇒虹を背景に、ノアとノアの家族、動物たちが手を合わせて神様に誓いをする。(挿絵参照)

考察

絵は、多少アニメ的ではあるが、子どもにとっては親近感をもちやすい描写の仕方である。登場人物の表情から、各々の気持ちが読み取り易い。

紙芝居のケースには、「目標」「解説」「使い方」が、紙芝居の本文の下段には「演出ノート」が記されており、読み手にとっての導きとなる。特に、「解説」欄には「神の召しにこたえたノアの信仰の姿を十分に伝える」ということあり、本文からも、彼の信仰と生き物を愛する慈愛の心がよく伝わる。

箱舟の形は定かではないことについても、必要であれば適宜説明を加えるようにとの指示がある。これは絵として箱舟が描かれており、それらを手がかりに子どもと保育者の関わりにおいて想像力を膨らませることが可能であろう。

本作品は聖書理解に基づき、福音的な作品であるとともに、「使い方」欄には「どんな動物が乗っていたか数えるなど、子どもたちと会話しながら展開するのも楽しい」と添えられている。このことから、保育者が一方的に紙芝居を読むのではなく、子どもとの対話を大切に教材として扱う自由や柔軟さをも備えた作品であると思われる。

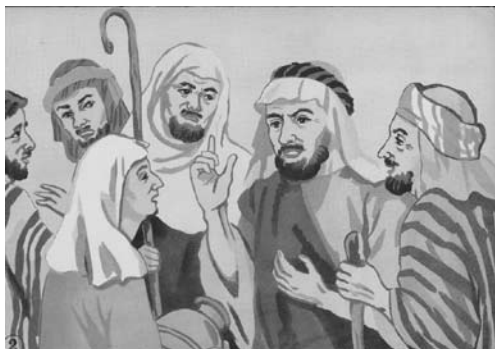
聖書との関連性

箱舟には、動物たちがつがいに乗ることになったこと、舟の塗料としてタールが用いられたこと、雨の後、舟から出たノアたちは祭壇を築いて神を礼拝したこと、各場面の神様の言葉に至る詳細な部分まで聖書に忠実に書かれている。

作品①「ノアと箱舟」と比べると、本作品は細部にわたって聖書に忠実に書かれており、内容の深まりを感じる

作品③「ノアの箱舟」文・野辺地天馬、画・松村三冬

基督教児童図書刊行会、1955年〔聖書箇所 創世記6章9節～9章18節〕



場面2



場面11

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	本文より、「毎日毎日朝から晩まで、おおぜいの大工さんがやってきて、せっせと造りつづけました。」	⇒冒頭から大きな舟造りが始まっている。それは、大工によって造られたとあり、聖書の記述とは異なっていると思われる。
2	天の神が人の世界が荒んでいることを嘆き、ノアに大きな舟を造るようにと命じる。 それを受けてノアは、近所の人たちに神のお告げを聞いたことを話す。	⇒絵は、ノアが人々に対して深刻な表情で話をしており、人々も同様な面持ちで受け止めている様子がクローズアップされている。(挿絵参照)
3	ノアという人物の人柄や家族構成について書かれている。しかし、周りからは変わり者扱いを受けている。	⇒ノアは信仰が厚く、正直で親切であること、家族は心の美しい人であると書かれ、彼の人となりがよく伝わる。ノアがこれから大水が来て世界が減びることを信じ、神の指示に従って舟を造っていることを人々は侮る。
4	舟が出来上がり、大きさは長さ150m、高さ15m、幅25mである。ノアの8人の家族と共に、鳥や獣、虫たちが雄と雌一匹ずつ舟に乗る。	⇒舟の大きさは、現在日本で使われている単位で記されている。絵では、舟に動物たちが長い列を成して乗り込んでいく状況が分かる。
5	人々は物珍しさや興味本位で舟に近寄ってきたが、悪口を言う。間もなく大雨が振り始め、何日間も続く。	⇒人々が慌てて舟から去る様子と、大雨が続き、野原や畑も水浸しになったと書かれている。
6	本文より「大きなお舟はらくらくと浮かび上がり…(中略)…白鳥のようにゆうゆうと…(中略)…漂いました。」	⇒大雨が40日間も続いて、舟は全く問題はなく無事であったこと、周りの家や木、山々が沈んでしまったことが書かれている。
7	世界中の物が水に沈んでしまうと、神様は風を吹かせて水を引く。山の頂が見え始め、まもなく舟はアララテ山に着く。そして、ノアは一羽のカラスを飛ばしたが、帰ってこない。	⇒絵では、ノアがカラスを飛ばしている様子が描かれている。
8	次に、ノアはハトを飛ばすとすぐに戻ってきてしまう。もう一度飛ばしたところ、オリーブの若葉をくわえて戻ってくる。三度目にも飛ばすと、ハトは戻ってこなかった。	⇒ハトが三度にわたって放たれた様子から、大水が引き、次第に生き物が暮らすことができる環境に移り変わっていく経過が分かる。
9	神様が、ノアにすっかり水が引いたため、生き物たちも舟から出ることを許可する。ノアは、生き物たちに慌てないよう、行儀よく整然と出るようにと指示する。	⇒動物を安全に誘導するノアの言動から、群れのリーダーとしての役割を果たしている様子が伝わる。
10	舟から出たノアは、息子たちと一緒に、神様にお礼を述べるための祭壇を作るようにと命じる。そして、生き物を焼いて捧げ物とする。	⇒舟から出て、まず最初にノアたちが行ったことは、神様を礼拝することであった。彼らの信仰心が現れている。

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(3)

11	ノアは祈りの言葉を述べる。「天の神様・・・(中略)・・・あの恐ろしい大水からお救い下さいました。有難うございます。・・・」	⇒絵では、ノアの家族が祈りの姿勢をとり、膝まずいている者もいる。神様に心からの感謝の言葉を捧げる彼らの気持ちが、絵の様子からも考察できる。(挿絵参照)
12	天には大きな虹がかかる。続いて、神様が世界を祝福する言葉が書かれている。	⇒ノアたちの純粋な心が神様に受け入れられる。神様はノア一家だけでなく、世界中を愛し、祝福するとの約束の言葉で話が締めくくられる。

考察

絵は、時代考証がされており、当時の人々の生活状況が分かる。

本作品では、大工が舟を造ったという設定になっている。聖書にはこのような記述はないため、実際に造ったのは大工なのかノア一家だったのかは分からない。作者は、子どもに理解しやすくするために大工を登場させたとも推測できる。

1955年に発刊され、年代物の作品であるが、本文は子ども達に語るにふさわしい文章で書かれている。一つひとつの言葉がよく吟味されて用いられている印象を受けた。

聖書との関連性

最後の場面で、神様の言葉があるが、これは聖書の「地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも寒さも暑さも、夏も冬も昼も夜も、やむことはない」(創世記8章22節)に非常に忠実に、紙芝居本文に記されている。このことから、聖書の話が単に過去の出来事に留まらず、現在の私たちも、神から祝福されていることを覚えることができると思われる。関連して、紙芝居の1場面の欄外に、発刊者の言葉として、「ノアの物語はまた遠い昔話ではないこと、私どもも毎日ノアと同じことを経験する」の発刊者の意図が込められており、このことから福音的な作品であると言えよう。

作品④「ノアとこう水」文・野辺地 天馬 画・林 俊夫

聖山堂、出版年不明、〔聖書箇所 創世記6章9節～9章18節〕



場面2



場面8

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	ノアと大工が熱心に大きな舟を造っている。これを見た村人たちは、ノアが気違いになったのではないかと噂をする。	⇒ノアと大工たちによって舟が造られているという内容である。
2	ノアは人々に、「神様が人々は悪いことをしてばかりで神に従わないため、間もなく大水で滅ぼすことになる」ことと、「心を入れ替えてこの舟に乗るように」と話す。 完成した舟は、長さ150mの三階建てである。	

3	鳥や獣たちが一揃いずつ舟に乗り込む。ノアは、村人にも箱舟に乗り込むようにと勧めるが、誰も聞き入れず、もの珍しそうに見ながら悪口を言う。	⇒動物たちが列を作って箱舟に乗っていく。人間で乗ったのは、ノアの家族 8 人だけである。
4	すると、空が暗くなり大粒の雨が降り出す。雨は夜通し続き、野原も畑も水浸しとなり、大きな池、海となっていた。	⇒絵では、人々が慌てて舟から去る様子が描かれている。緊迫した状況が感じられる。
5	本文より「大きなお舟はらくらくと浮かび上がり…(中略)…白鳥のようにゆうゆうと…(中略)…漂いました。」 雨は40日40夜続き、ようやくやむ。	⇒絵と本文では、水の中に舟だけが浮かんでいることから、世界中の全ての物が水に沈んでしまったことが分かる。
6	神様は風を吹かせて水を引かせる。山の頂が見え始め、まもなく舟はアララテ山に着く。そして、ノアは一羽のカラスを飛ばしたが、帰ってこない。	⇒絵では、ノアがカラスを飛ばしている様子が描かれている。
7	次に、ノアはハトを飛ばすが、すぐに戻ってきてしまう。もう一度飛ばしたところ、オリーブの若葉をくわえて戻ってくる。三度目にも飛ばすと、ハトは戻ってこなかった。	⇒ノアがなぜハトを選んだのか理由が本文中に書かれている。 ⇒また、ハトが3度にわたって放たれた様子から、大水が引き、次第に生き物が暮らせる環境に移り変わっていく時間の経過が分かる。
8	神様が、ノアにすっかり水が引いたため、動物たちも舟から出て良いことを許可する。ノアは、慌てないよう、行儀よく順番に出るようにと指示する。	⇒神様の指示を受けて、ノアは動物たちを舟から出すことを決断する。神に忠実なノアの信仰が現れている。動物たちを労わるノアの優しさも滲み出ている。(挿絵参照)
9	ノアとその家族たちは舟から出ると、祭壇を作る。神様が大水から守ってくれたお礼のしるしとして生き物を焼いて捧げ物とし、その香りが天に上る。	⇒絵では、ノアが祭壇の前で両手を広げて神様をほめたたえている。家族たちも膝まずく者もあり、神への礼拝を捧げていることが読み取ることができる。
10	空には、大きな虹が橋のようにかかる。神様はもう二度と大水で世界を滅ぼすことはしないこと、皆が自然とともに楽しく暮らすことができることを約束したと述べる。	⇒ノアたちの信仰が神様に受け入れられる。神様はノアたちだけでなく、世界中を愛し、祝福するとの約束の言葉で話が締めくくられる。

## 考察

先の作品③「ノアの箱舟」と話の流れ、詳細な文章も、絵の構造もそのまま類似している。両作品とも文は野辺地氏によって書かれたことからそのように分析できる。

本作品は出版年は不明であるが、1954年(S24)に代表者となる関屋友彦氏が「基督教児童図書刊行会」を創設し、1957年(S29)に同氏は書店「聖山堂」を開いたことから<sup>1)</sup>本作品である「ノアと洪水」は、先の「ノアの箱舟」をベースにし、タイトルを変えて、内容はほぼ同様に再販したのではないかと推測される。

また、本作品は英語訳が添えられていることが特徴的である。作品③「ノアの箱舟」には、最初の場面の欄外に、「英文解説用意あり、ご希望の方に無料送呈」と記されている。これを反映した結果として、作品④「ノアとこう水」では、英語訳を添えたのであろう。

## 聖書との関連性

本作品においても、先の「ノアの箱舟」と同様に、大工が舟を造ったという設定になっている。聖書には大工が造ったのか、ノアの家族が造ったのかという詳細の記述はないため、実際のところは分からない。

ノアは、神のお告げを受けた時と、箱舟が完成してよいよ乗り込む時の2度に亘り、人々に一緒に乗り込むことを勧めている。周りからあざ笑われても、人々を助けたいというノアの慈愛が現れている。

全体的には、作品③と同様に、聖書の内容に忠実な書かれ方をしており、福音的な印象を受ける作品である。

## 4. 考察

まず、ノアが神に選ばれた理由について考えたい。聖書には、ノアについての記述で「ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ」(6章9節)と記述されている。同様に『ティンデル聖書注解創世記』には、「ノアは神に近く歩んだので神から信頼され、神から秘密を打ち明けられるまでになった」<sup>2)</sup>とある。

その一方で『ATD旧約聖書注解(1)創世記』では、「ノアについては名前だけが知られているにすぎない。すなわち、この神の選びの根拠は把握できないのである。この選びは、神の恩恵の意志ということでは説明できない」<sup>3)</sup>とあり、聖書解釈と、注解書間において若干の異なった記述があるように思われた。これは、ノアの物語が、ヤハウエ資料と祭司資料を基にしてまとめられたものであり、二つの資料ははっきりと区別されておらず入り組んで用いられており、各所に矛盾や重複が見られることが原因である<sup>4)</sup>。

二つ目に、箱舟に着目していきたい。神が箱舟を三階建てで作るよう命じた意図として、神が動物たちを秩序をもって区別された意図が分かる<sup>5)</sup>。建築上の視点においても、神の計画の所在を読み取ることができる。

箱舟が完成し、動物たちが乗り終えた後、「主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた。」(創世記7章16節)とある。この表現は、「裁きのまさに瀬戸際で、神の父親のような関わり方を美しく描いている」<sup>6)</sup>と記されている。紙芝居作品②「ノアのはこぶね」にも、神がドアを閉めたと書かれており、この一連の出来事が神の主導によって進んでいることが分かる。

また、新約聖書ペトロの手紙Ⅱにおいても、ノアの箱舟について再び取り上げられており、(3章5～7節)これらについては、さらに大きな裁きが待っていることを私たちに教えており、その

裁きは地球全体だけでなく、宇宙それ自体にも及ぶのであると記されている<sup>7)</sup>。

三つ目に、紙芝居4作品全てに記述されている、虹の扱い方や意味について考察する。紙芝居①では、本文中に「神様は、青い空にきれいな虹をかけてくださいました」とあるだけで、神の意図については詳しい記載はない。紙芝居②～④においては、「神の約束としての虹」であると本文中に記述があり、聖書の内容により忠実である。

注解書における解釈を見ると、『虹』は、旧約聖書の他の部分では武器としての弓を意味している。すなわち、神は世界に対し、彼の弓を放棄したことを宣言したのである。<sup>8)</sup>という記述には神学的な視点が感じられる。古代の人々は、虹に様々な宗教的な意義を見出した。天に昇り降りする神と人との間の掛け橋であると信じている者もあり、イスラエル人だけは神と人との和解をしめす契約のしるしを虹に見ていたとされている<sup>9)</sup>。

筆者は、これまでの一連の福音紙芝居研究(尾上・柴田、2014、2015)において、より聖書理解を深める手立てとして、シントラー著「聖書物語」における分析を行ってきた。本研究においても同様に「聖書物語」を用いることとした。

本著において特徴的な点は、1つ目にはノアのゆるぎない神への信仰が書かれていることである。大洪水に遭っても、彼には不安や焦りが微塵も感じられない姿から、神を待ち望む姿勢が伝わる。

2つ目には、子どもの台詞があり、子どもであるがゆえの純粋な発言や、神への問いかけを含め、ノアに対しても率直な疑問が投げかけられている点である。3つ目には、本箇所タイトルである「虹の橋」の通り、創世記9章13、14、16節に亘って記されている虹に焦点を当てて、神がなぜ虹を現わしているのかについて触れられ、文章が締め



くくられている点である。ここでは、虹は神様から私たちに与えられた約束のしるしであること、神様は虹を通して私たちに望んでいることは何かについても深く知ることができる<sup>10)</sup>。虹が、人間にとっては自然現象という科学的な理解に留まらず、神の意図をもったものとしてこの聖書箇所を読む時、福音的な解釈が得られる。

本著は紙芝居とは違い、文章による記述がなされているため、ノアの箱舟の箇所をより深く、言葉で構成された豊かな表現を味わうことが可能である。本文は、子どもではなく大人向けの文章および内容であるため、保育者が事前学習として学ぶ教材にふさわしいと思われる。

## 5. まとめと今後の課題

今回調査した紙芝居において、それぞれの作品を比較した結果、4作品とも聖書の記述に従って忠実に描かれていることが分かった。聖書や註解書を紐解くと紙芝居上に記されなかった知見に出合うことが多かった。それは読み手側の知識として必要である。

これまでの筆者による一連の紙芝居の研究においては、各々の作品が作者によって意図的に焦点を当ててクローズアップされているものも見られたが、今回のノアの物語においては、そのような特定の部分に焦点を当てて表現している場面は見られなかったことも特徴的である。

「ノアの話はたくさんの動物が出てきて、子どもたちが大変喜ぶものである。」<sup>11)</sup>とあるように、子どもにとって動物は身近で親しみのある生き物であることや、彼らが納まる箱舟の大きさを想像することは、非常に心躍るものであろう。「目標は、周囲の人々からあなどられたが、神の命令に素直に従って大きな箱舟を造り洪水より救われたノアの信仰を伝える」<sup>12)</sup>こと、「神の審判により悪い人々が溺れて滅んだことを強調しないように」<sup>13)</sup>とあり、聖書上の物語ではあるが、子どもたちを死の恐怖にさらさないことへの気遣いを伺い知ることができる。また、「どこまでも神の言葉に従ったノアの信仰を示す。神は約束の印として虹を現されたが、幼児には虹を見た経験がないかもしれないから、前もって絵で示しておいた方がよい。」<sup>14)</sup>と、子どもへの配慮が表れている。この

ようにノアの信仰について強く強調していることは、子どもに希望を与えるものである。

本研究では、紙芝居の作品の分析が中心であり、これらを保育そのものに用いることについては触れることはできなかった。この点については今後の課題である。

## 【謝辞】

本研究をすすめるにあたってご助言を賜った、本学名誉教授尾上明子氏に心より御礼申し上げます。

## <引用文献>

- 1) 鬢櫛久美子、種市淳子「保育のなかの紙芝居 - 関屋友彦の福音紙芝居活動を通して -」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第29号、pp. 1 - 12、2007
- 2) デレク・キドナー著、遠藤嘉信・鈴木英昭 共訳『ティンデル聖書注解創世記』いのちのことば社、2008年、p.111
- 3) 山我哲雄訳『ATD旧約聖書注解(1)創世記』ATD・NTD聖書注解刊行会、1993年、p.189
- 4) 高野勝夫著『子どもに話す旧約聖書のお話(旧約聖書の35の聖話)』キリスト教視聴覚センター、1988、p.29
- 5) 同上、p.113
- 6) デレク・キドナー著、遠藤嘉信・鈴木英昭 共訳『ティンデル聖書注解創世記』いのちのことば社、2008年、p.115
- 7) 同上、p.120
- 8) 山我哲雄訳『ATD旧約聖書注解(1)創世記』ATD・NTD聖書注解刊行会、1993年、p.218
- 9) 高野勝夫著『子どもに話す旧約聖書のお話(旧約聖書の35の聖話)』キリスト教視聴覚センター、1988、p.29
- 10) レギーネ・シントラー作・下田尾治郎訳『聖書物語』福音館書店、1999、p.22
- 11) 高野勝夫著『子どもに話す旧約聖書のお話(旧約聖書の35の聖話)』キリスト教視聴覚センター、1988、p.30
- 12) 同上、p.30
- 13) 同上、p.30
- 14) 同上、p.30

<参考文献>

- ・『聖書』新共同訳
- ・柴田智世、尾上明子「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察－新約聖書を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第36号、pp. 71 - 83、2014
- ・尾上明子、柴田智世、「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(2)－クリスマス物語を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第37号、pp. 55 - 67、2015

## **A Study on Christian Kamishibai from an Evangelical Perspective (3)** **—With a Focus on The Story of Noah’s Ark—**

Shibata, Tomoyo\*

本研究では、キリスト教の福音紙芝居を保育に取り入れる際の一つの指針として、ノアの箱舟の作品を取り上げ、聖書に基づいた内容の分析と、子どもに語る際の聖書からのメッセージの視点を示すことを目的として研究を行った。

その結果、全ての作品において聖書の記述に従った内容構成で書かれていたこと、主人公であるノアの信仰に焦点を当てていたことが特徴的であった。

課題としては、特にキリスト教主義の園においては、当該聖書箇所の意味を子どもに伝えるとともに、紙芝居が有効に用いられることである。

キーワード：紙芝居, 聖書, ノアの箱舟, キリスト教

